



邦楽華麗なる技 14 笙

古くて新しい、  
光の音

9/20(木)  
18:30開演

雅楽はその楽器が正倉院に収められていることから分かるように、非常に古い時代から親しまれてきました。雅楽の主楽器「笙」は、他の楽器と違って和音を出せるため、古典はもとより現代作品でも様々に使われています。今回は、「笙」を国際的に広めた第一人者、宮田まゆみさんの笙の技をたっぷりお届けします。

世界と日本の笙

笙はパイプオルガンと同じ原理で、管の中に収められたフリーリードが音を出します。そのため、英語では「口のオルガン」(マウス・オーガン)と呼ばれます。日本の笙はその形が想像上の鳥である鳳凰の姿に喩えられるため、鳳笙とも呼ばれます。匏と呼ばれる下部の上に17本の細い竹管を円形に配置し、竹管に開けられた指孔を押さえて音を出します。17本のうちの15本の竹管の下の方には、鉛のおもりがついた金属製の簧(リード)があり、この二つが音高を決めます。息によってリードが湿ると音高が狂うので、舞台上でも火鉢や電熱器を使って温めて乾燥させます。なおアジアには笙の仲間があります。ラオスやタイの笙(ケーン)は管が筏のように二列に並んでいます。ですが、ヴェトナムの少数民族の笙は管が四方に伸びています。

笙の可能性

雅楽の管楽器には主なもの三つあり、箏(びん)は「人の声」、龍笛(りゅうてき)は「天と地を泳ぐ龍の声」、そして笙は「天から差し込む光」に喩えられています。他の楽器と違い、笙は合竹(あいたけ)という和音を演奏できる。もちろん、合竹は西洋近世で使われる和音とは構成が異なりますが、5〜6音を組み合わせたもので、その組み合わせ方に決まりがあります。古典では11種の合竹が使われますが、曲によっては、二つの管だけを吹くこともあります。



ラオスやタイのケーンでは、和音をパツと歯切れよく変えますが、日本の笙では一つの合竹から次の合竹に移る際に全部の指を同時に変えることをせず、「手移り」といって、一定の順序に従って滑らかに変えていきます。また、合竹から生まれる高い倍音も、笙の繊細な響きを作ります。こうした響きに魅せられた現代の作曲家が笙のために作品を作ってきたのも理解できるでしょう。紀尾井小ホールという空間だからこそお届けできる笙の多様な響きをどうぞお楽しみください。

復元された  
笙も登場  
正倉院の宝物などを参考に、昭和になつて復元された笙の仲間が、笙よりも一オクターヴ低い音を出す笙です。笙との違いを公演でお聴きいただけます。

笙の魅力 宮田まゆみ

「笙」は、何本かの竹が束ねられ、その竹の組み合わせによってさまざまに変化する色彩豊かな和音(=合竹・あいたけ)を奏でる楽器です。息づかいも独特で、「吹く」「吸う」を交互に繰り返して途切れることなく和音を奏で続け、その様はまるで光の河が流れているような印象を与えます。今から三千年以上前の古代中国ですでに演奏され、



奈良時代以前に日本に伝えられ、今でも多くの人々に親しまれている「笙」の、いろいろな姿をお楽しみください。